

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和二十四年三月二十八日逓検省特別授承認雜誌第三五二號  
昭和二十四年十一月廿八日印刷 昭和二十四年十二月一日發行

第十五卷

第十二號

# 浄土

## 十二月號

法然上人法語

眞野正順

笹鳴を聴く朝

吉田絃二郎

商法と信仰

中野剋子

死生わづらいなし

佐藤賢順

## 荷負群生

年の瀬が來た。暮れてゆく年の聲音は、あるいはあわたし  
く、あるいはひそやかに、人々の様々の心にひびいてゆく。想  
えば、われひとともに、重き荷を負うてまたこの一年を辿つて  
來た。日本も、世界も、一日として休まる暇もないような一年  
を歩んで來た。たゞ急ぎ足に、激しい浪の飛沫をあび、烈しい  
風によろめきつゝこゝに來た想ひさえする。重荷を負うて遠き  
道を行くが如し、とも、重き車をひいて坂路をのぼるとも譬え  
られ訓えられている人生なのである。

かゝる世に佛教徒は何をなすべきか。信仰者は如何にあるべ  
きか。いろいろに批判はされ、論議はされよう。しかしいちば  
んに、なすべきことは、佛教者が本當に「佛教する」ことであ  
り、信仰者が純正に「信仰する」ことだと思ふ。批判も論議も、  
身を對岸において火を眺める態のものでは何の意味もない。先  
づわれひとともに、佛教に、信仰に入ることの他にはない。社  
會をどうする。自分をどうする。

大無量壽經に「群生を荷負して重擔となす」という言葉があ  
る。一切生きとし生けるものを背負うて立たれるのが、み佛の  
大慈悲である。この大きき心を眞に仰ぎ、眞に戴くものこそ、  
佛心の働きに參ずることも出来る。如來の大悲を信知し信賴す  
るものにとつては、人生の重荷も、年の瀬の苦惱もいまは苦に  
ならぬであらう。(藤田寛雅)

## 目次

|                |           |
|----------------|-----------|
| 法然上人法語(三)..... | 眞野正順(21)  |
| 法然上人を讀う.....   | 寺澤亮(10)   |
| 法然上人に聞く.....   | 長谷行雄(12)  |
| 商法と信仰.....     | 中野刻子(12)  |
| 笹鳴を聴く朝.....    | 吉田絃二郎(1)  |
| 父と私と佛教.....    | プリンクリー(8) |
| 安樂死の問題.....    | 佐藤密雄(19)  |
| 脅迫.....        | 西谷修一(13)  |
| つるしあげ.....     | 旭俊正(11)   |
| 初冬の寺(句).....   | 小高舒明(18)  |
| 死生わすらいなし.....  | 佐藤賢順(5)   |



# 笛鳴を聴く朝

吉田 絃二郎

颯風の過ぎた朝、武蔵野を歩いて林の間から富士を見た。富士は一夜の中に眞白な雪につつまれてゐた。秩父も甲州あたりの山々も雪をいただいてゐた。冬がすぐ近くまでやつて來たのだ。病を持つ身には耐へられない氣もするが、尊い氣もする。

若いころは人生に希望があり、光明があるから生きてゐたいと思つた。

老いの身は寂び果てた人生を觀するがゆゑに、尙ほすこし生きてゐたいと思ふ。

平常はさまで人生に對して未練もないやうに思つてゐるが、さていよいよ、一步一步死に近づいて行くのだと思ふと、涙ぐましい氣もする。

( 1 )  
多磨の田圃を歩いて行くと、うら枯れた蓮が五六本冬

のやうな冷たい北風にわなゝいてゐる。老いの身には美しい花を開いた夏の蓮よりもなほ一層ふかく枯れ枯れの蓮に親しみを感じ、寂び果てたるものゝ尊さを見出す。

若い日には楽しみあればこそ人生を欲する。

老いの日には、人生に悲しみあればこそ人生を欲する。

自分の父も母も姉たちも妻もみんな木の葉のやうに散つて行つた。そしてわたくし獨り、それ等の悲しみを抱いて、病みつゝ生きてゐる。わたくしも死んだら過去、現在の一切の寂寞からも、悲哀からも逃がれることができよう。しかし、わたくしはまだ生きてゐたい。寂寞といひ、悲哀といふも人生にのみあるからだ。わたくしはもつともつと、秋の蓮のうら枯れた姿をじつと觀照したい。風の音に聴き入つて過去を憶ひ、故人を偲びたい。

十日ばかり前、不圖庭に下りて、つくばひの前の路の花を見た。路の花は寂び果てた感じの花であり、きはめて東洋的な、禪味ゆたかな花である。同じ花でも自分を見せようとしてゐる感じの花があり、一向に自分といふものを見せようとしてない花がある。路の花、茶の花は自分を見せようとしてない花である。石の蔭に隠れ、植ゑ込みの下蔭にかくれ咲き敢て人の見んことを求めない。己れを正しくして、端然として咲き、薰り、寂然として獨り散華する。

今朝（十月三十日）今年はじめの鶯の笛鳴きを庭に聞いた。思ひは遠い故郷の昔に還る。茶の花の下に笛鳴きを聴くところになれば、草山は枯れて山には茱萸や檳の實が赤く熟れてゐた。檳の實はその細長い赤い實の先端に更に青い球がくつついてゐるので、全體がくもり猿のやうな道化じみた玩具のやうな感じをあたへた。茱萸の實は小粒でまん丸く、すこし澁味があるが、檳の實は甘かつた。

笛鳴きを聴くところになれば雜木山に入つて、鳥わなをかけた。木の小枝と落葉を搔きあつめて狭い園をこしらへ、内に檻の實や、ひざかきの實を入れて小鳥を待つ

た。鴨や、ちようま、のしこ、鶯が梢に鳴いてゐたが一度もわなにはかゝらなかつた。狐が一度夕暮の山徑を横切つて行くのを子供心に恐ろしく思つたことがあつた。

そのころの竹馬の友の一人で、長崎の原爆の戦禍に悩んでゐる友人がある。かれは醫師である。かれは當日浦上の病院で患者を診てゐた刹那に、患者といつしよに建物の下になり、今日まで四年有餘、病床に仰臥したまゝである。恐らくかれは醫科大學では永井博士より先輩であらう。わたくしは、黙々として一言も病苦を語らず病床に在るかれをかへり見て、頭の下る思ひがする。つい最近のかれの消息に「寢てゐる枕頭に近く頬白が來て鳴いてゐる」と書いてあつた。

小石川茗荷谷に近く住んでゐたことがあつた。四十幾年前のことである。まだ畑がつづき、竹藪などが見られたところである。坂を下つたところに淨土宗の寺で深光寺といふのがある。瀧澤馬琴の菩提所である。水霜が降りるところになれば、あの邊の茶の花の下に鶯の笛鳴きを聴いたことを記憶してゐる。

深光寺に葬られてゐる瀧澤家四世の祖で瀧澤左仲とい

ふ人がある。この人について馬琴は「吾佛の記」の中に面白い話をつたへてゐる。

左仲は松平家に仕へて、「行狀正しくして、職事に過あることなければ、任用大かたならされども、壯年より多病にして、日毎の務に勝ざりけん」といふわけで、齡四十あまりで職を辭し、隱居をした。そこで祿を削られてわづかに月俸二口を賜ふことになり、その跡繼ぎの条之助が近習となり、いさゝかの扶持をいただくばかりで赤貧洗ふが如しであつた。それでもかれは志を改めず、靜かに世を避けてゐた。或る年の冬、庭に籠かごを掛けて鶯を捕へ「夜がひして、はやく鳴かせ」その籠を窓のほとりにすゑて病苦をなくさめてゐた。

ところが或る日、通りかゝつた兩國あたりの鳥屋が立ち寄つて「ぶしつけなお願いながら、この鶯をわたくし共におゆづりいただけないのでございませうか。金子一兩を差し上げまするが、いかがなものでせう」と問うた。

左仲は、ふきげんな顔をして「拙者は金錢の欲しさに鶯を飼ふてゐるのではござらぬ」といつた。

鳥屋は詮方なしに歸つてしまつた。

それを見送つてゐた妻が「歳の暮とて手許不如意の折から、一兩といふ金はありがたいことではございませるか」と口を出した。

「一兩の金は貴い。致死して老を養ふ身にとりては大金である。しかし物を賣りて利益を得るは商人のすることとて、武士のすべきことではない。この鶯を良にかけ、籠に飼うて、鳴かして聞くだけでも、物の生を苦しむる罪を思はなければならぬ。鶯を賣つて金にかへなば一層罪を重ねることになる」といひ鳥籠を開けて、鶯を放してしまつたといふことである。

瀧澤家五代の祖を条之助といふ。この人も父左仲に似て惻隱の情の深い人であつた。或年、野火留の平林寺（松平伊豆守の墓がある。河越街道に沿ひ江戸から七里）に代參の歸り路に、曠野の中で、日も暮れかゝつてゐた。傍の竹藪の中ではさばさといふ物音がした。従者たちはあわてふために、狼だ！ 狼だといつて逃げ出さうとした。条之助は家來に持たせた槍を取り、石突の方でしづかに藪の中を掻き分けて見た。一頭の盲馬めくらが捨てられてあつた。加之に後脚が蹇たる馬であつた。「無慈悲な飼主に棄てられたのであらう。このまゝにして置いたので

は狼の餌食となるであらう」と家來に馬を曳かせて名主の許に行き、「盲目の馬を捨つる者は罪せらるゝことになつてゐる。しかしあの馬を助けるなら罪を問はないことにする。飼主にその旨を傳へてあの馬をいたはるやうに取りはからへ」と命じた。名主は一議に及ばず盲馬を引き取り、さらに家僕をして糸之助をその夜泊るべき宿驛まで送らせた。

糸之助も鶯を聴くことが好きで、かねて鶯を飼つてゐた。その他に糸之助が他界した時（安永四年）は駒鳥、畫眉はなせう鳥など六七羽飼はれてゐた。その初七日に妻が籠を明けて放つてやつたが、なほ二十日ばかりは、庭の樹から離れなかつた。

こゝにまた馬琴は糸之助が飼つてゐた鶏について面白いことを書き残してゐる。

それは糸之助が歿くなる前の年（安永三年）のことである。糸之助が飼つてゐた雌鳥が化して雄鶏となり、晨をつくるやうになつたといふことである。妻が氣味惡がつたので二十つがひ以上の鶏を一羽もとどめず餘所にやつてしまつた。

馬琴ほど筆まめに身邊の事を書き付けた人も稀である

が、そのおかげで、わたくしたちは「人間馬琴」について知ることができる。

かれの一人息子の琴嶺は親孝行であり、馬琴は精根をつくして琴嶺を育て上げたが、三十八歳にして、父に先立つて歿した。

琴嶺の肖像畫を渡邊華山に依頼した。ところが華山が家來に菓子折など持たせて、馬琴の家を訪れた時は琴嶺はすでに鬼籍に入つてゐた。

「悴は昨日歿くなりました」と馬琴に言はれて、華山はただ驚歎するばかりであつた。

「納戸に柩に入れられたまゝになつてをります」からと華山は次の部屋に導かれた。

馬琴は柩の蓋を取つた。華山は一時間ばかりかゝつて琴嶺の死顔を描き終つた。寫生の終つた時、馬琴は餘程ありがたかつたと見え「此の舉定に千金なり」と記してゐる。

馬琴の生涯にとつて、最も悲痛な人間苦の一齣である。

\* \* \* \*

# 死生わすらいなし

佐藤賢順

法然上人のお言葉に

生けらば念佛の功つもり、死なば浄土にまいりなん。

とてもかくてもこの身には、思いわすらうことぞなき  
と思ひぬれば、死生ともにわすらいなし。

というのがある。このお言葉は數ある御法語の中でも、これだけで完結した意味を表わし、しかも佛の本願に歸命した念佛者の心境を卒直に示すお言葉として、大變尊いものである。再唱三誦して耳に響くりズムも快く、口ずさんでいるうちに、信仰の深い境地がそのまま流れ込んでくるような感じがする。特に終りの、死生ともにわすらいなし、という結びは、宗教生活がこの現實にもたらす明るさを教え、今日の生活に安心を與える。未來の往生ばかりを説く浄土教關係の法語の中では、珍らしく明るい一面を説いたものである。

(5)

浄土教は死後における極樂往生を教えるのであるから、生死を超越した現實におけるあり方というようなことについてでは説くことが少ない。宗教の持つ現實的意義、實踐的

意義、いわゆる現世利益の方面に關しては、あまり觸れていないのである。觸れているとしても、せいぜい傍ら説いている程度で、例えば念佛の現世利益として觸光柔軟ということを擧げているのなどがその一つである。念佛者は如來の光明に包まれるから、心も體も柔かに溫やかになるという位である。それ以上に死生を超えたというような大安心を説いたのは少ない。

しかし浄土教は未來の往生の方面だけを説くのでなく、信仰生活の現實における力強い働きの方面をも充分に明らかにしなければならぬ。未來の往生ということは、この肉體の死を豫想せずしては考えられないことであり、肉體の存する間はかなえられない願いであるから、そこには一抹の憂愁感、暗さが伴いがちである。これは浄土教では厭離穢土、欣求浄土が出發點となるために、いきおい現實否定の方面が強く説かれるからである。しかし眞の念佛者の日々の生活は決して、單に現實否定的な一面だけでなく、従つて憂愁とか暗さとか陰慘という一面だけではない。む

しろ逆に、現實を否定し超越しているからこそ、そして一切を如來に委せているからこそ、何事も如來の力でありお蔭であり、如來の光の中にあるとして有難く頂き、光明のうちに歡喜して日々を送る明るさがあるのである。この光明と歡喜とのうちに死生わすらいなき大安心が生れるのである。

勿論その現實を説く餘り、未來の往生や極樂の實在の信仰に動搖があつてはならない。宗教は表現の世界であつて、お經に説かれていゝような極樂や佛の姿は、その最も究極の表現である。單なる空や無の世界でなく、空や無を通り越して表現の、しかも究盡した表現の世界にはいつた所に、淨土教が念佛教の最高峰である所以があるのだが、これは別の話題になるから今は述べられない。

死生ともにわすらいなしとは、死生一如のことである。人生においては人間の願望に反するいろいろの矛盾が現れてくる。人間は何事もいつまでも榮えて衰えず、若くして老いず、健やかにして病まず、うつろい變らざることを願つてやまない。しかし如實に眺めれば、榮えて衰えざるものはなく、青春は忽ち過ぎ去つて嚴冬の霜雪に變り、健やかな者にも卒爾として病の訪れはある。これらは人生における矛盾である。愛しき人との別離が矛盾であるのはいうまでもないが、厭わしき者との遭遇もまた矛盾ではない

か。これらは皆うつろい易いことについての悩みである。人生の苦悶はこの矛盾から生れる。佛道で行苦というのがそれで、行苦の行は常に移り變つてゆくことであつて、この苦しみは、氣ずくと氣ずかざるとによらず、生命の根柢にあつて常に生命全體を揺り動かしている苦悶なのである。老も病も死もみなこの行苦に揺り動されているが、すべての不安、苦惱のなかで死が最も著しい不安であり、一切の人生の矛盾は死という矛盾に集約される。生に對する死、人間はこの矛盾に逢著してはたと迷い戦くのである。死は必ずしも私の死には限らない。深く血縁に結ばれる者身近かにいる者の死もまた私の死と同様に、迫り來れる現實として體驗される。

こういう時、その矛盾の解決を大方のひとは宗教に求めるのである。長い宗教的な冥想や反省や修行の結果、生と死との對立は一應克服され揚棄されて、現實の日常の心境よりは一步高い段階へと抜け出でることになる。こうして達せられた境涯が死生一如である。死生一如は死の超越であるとともに生の超越である。しかし一如の境涯は、いつの間にかまた單なる日常性に頽落して、無限の矛盾を孕んだ現實生活に逆戻りしてしまふ。折角の修行も元の默阿彌になつてしまふのである。嚴密に言えば、この頽落は全くの逆戻りではなく、日常の生よりは一段と高く上つた一如の状態そのもののうちに矛盾が現れてくるので、これがま

た一つの生の状態として、その對立たる死と向き合うことになる。こうしてまたその克服が次のより高い境地への道を開くのである。この道程は終止するところがない。菩薩の修行に五十二位の階位があるとか、三大阿僧祇劫の修行を要するとかいうのは、この限りない生死超越の道程を言ひ現わすものに他ならない。いまの言葉でいうと、宗教體驗の道程は辯證法的過程を辿る、というのである。

同じ宗教の世界でも、淨土教の信仰はそれとは全く異つてゐる。冥想や修行によつて漸次に高い境涯に上つてゆくのではなくて、信仰によつて日常の立場を轉換して、いきなり宗教の世界にはいるのである。日常生活では常識や経験や、それを整理してできた科學的知識などに頼つて生きてゐるのであつて、そこで司配してゐるものは合理性であるが、淨土教はこれを一轉廻させて、信仰によつて、この世界を佛の本願の世界として有難く頂くのである。何事も佛の本願の力の現れであり、佛の導きの力、慈悲の力は、至る所に満ち溢れてゐるとして受け取るのである。一木一草の息吹きも、花の微笑みも、水の流れも火の燃え上るのも何もかも本願力でないものはない。この世界を佛の導きの世界として頂き、日常の生活をそのお導きのままに委せて生きるのである。これは科學的合理性の世界ではできないことである。合理性によれば、春花が咲き秋木々が紅葉す

るのは、當り前であつて何の不思議もない。水が高きより低きに流れ、火が低きより高きに燃え上るのは、必然であつて何の珍らしいこともない。しかし信仰の世界では、これが不思議となり、人間の知性の計り知れぬ佛智の働きとして頂けるのである。佛智不思議である。

けれどもまた信仰の世界に入つたからといつて、そこでは合理性が否定されるのではない。人は合理性の世界を否定するならば、生きてゐることができないのであるから、その世界に生きながら、それを超え出でて、というよりはむしろその立場を大きく轉換して、合理性の世界の他に生命に光明に満ち溢れた本願の世界があることに思いを馳せなければならぬ。知性偏重の社會に育つた青年達は、幼い頃から信仰の世界への教養を全く封ぜられていたので、不幸にも宗教的感覚を失つてゐる。これは現代の最大の不幸の一つである。

それはさて置き、初めの話題に還るが、こうして佛の本願力に歸命して一切を佛に委せた日常は、歡喜と感謝の中に、生や死のわすらわしさを全く忘れた生活である。淨土教の持つ現實生活へのこうした明るい働きかけがもつと強調されなければならない。(終)

本稿は先頃執筆した「實存と死」(六月)「現代人と死」(七月)に續く結びであるが、途中餘り時日を経過したので、獨立の一篇の體裁をとつた。

# 父と私と佛教 (二)

J・プリンクリー

私の断片的な印象をたどつてゆきますと、父と佛教とを結ぶ線に浮び上つてくる人が幾人か居りますが、その一つの想ひ出をお話しませう。

私たちは日清戦争前までは、麴町に住んで居つたのですが、父の處へは毎日多くの内外人が訪ねて來まして、仲々賑やかでした。その頃の私は、ほんの六七歳、従つて訪問客がどういう人たちなのか、さつぱり知りませんでした。客が、その人たちの中で容貌といい、風采といい、子供心にも印象に残つた特徴のある「小父さん」がいました。ある時、その小父さんが私に一枚の畫像を呉れました。「これは誰の畫ですか」と尋ねたところ、「これはお釋迦さまだよ」と教えてくれました。子供心にもお釋迦さまは偉い方だと父からも聞かされていたのだと想ひますが、そこで私はこ

のおちさんに質問しました。

お釋迦さまとキリストはどちらが偉いのですか。

ところが、小父さんは、靜かに「それは小父さんのように知識の浅いものには仲々判らないよ」と答えられたのですが、この答は子供の質問に對して實に眞剣な言葉だつたと思います。子供の私はこの答で充分納得していました。その後この小父さんが誰であるかは分らぬままに、ただその風采と、お釋迦さまの畫を貰つたことなどをハッキリと腦裡に刻みつけられて居つたのですが、ずーつと後になつて昭和の初めの頃でしたらうか、今は亡き渡邊海旭氏のところで、多くの知名の人たちの寫眞を見せて貰つてゐる中に偶然、子供の私の印象に残る小父さんと全く同じ人の寫眞が現われて來ました。これはと、「誰ですか」と渡邊氏に尋

ねると、「それは南條文雄氏ですよ」と言われ、はじめて、「ア―あれが南條博士だつたのか」と知つたようなわけでした。父と南條博士との交遊は浅からぬものがあつたように想われ、父の佛教に關する多く知識は、南條博士から相當導入されていたのではなからうかと、父と佛教を結ぶ一つの大きな線を探しあてたような氣がしました。

これもダンマパーダ師にゆかりのある話なのですが、私が師と四方山話の際に聞いたことですが、英國のある僧正が日本を訪問したとき、父を訪ねて「キリスト教が日本に與えた善事の最たるものは何でせうか」と聞いたところ、父は卽座に「それは、佛教に刺戟を與へたことです」と答えたそうです。その僧正はもつと異つた答を、むしろキリスト教活動そのものの中から秀れた點を指摘した答を或いは期待していたのかも知れませんが、父の觀點は、當時の佛教の活動の如何につよく置かれていたことが、この答え方からも分るような氣がします。

この言葉はまことに、意味深長なものがあり、黙して味はうべき點が、キリスト教に對しても、佛教に對しても、

あると思います。今日に於ても、若し私が同じような質問を受けたとしましたら、やはり父と同じように返事をする事だろうと思つています。前にも申したかも知れませんが、父は自ら佛教を信ずると明言したことはありません。しかしこのような答を發した心境には、私として少なからず思い當るふしがあるのであります。

これは父ではなく母の追憶の一つですが、その頃私は母に連れられて毎月一回、芝の増上寺で行はれた「お花の會」に參つたことを記憶して居ります。子供のことでですから、お花のことは分りはしませんでした。月一回のこれが子供の私には楽しみだつたのです。というのは、増上寺でキツト紅白のお菓子が出ましたので、實はお花よりこの方が嬉しかつたわけです。まことにたわいもないことなのですが、しかしいま、佛教者としての私を育ててくれた幼少時から環境の中で、案外こうして、お寺へ參つたりしていたことが、目にみえぬ縁を起してきていたのではなからうかと考えます。

最後に、父の口からはつきりと佛教に關係あることとして聞いたことを申しておきませう。明治四十四年に私が第一回の歐洲留學から歸つた頃のことです。何かの話の序で

にしみじみと父が言うのには、「日本の武士の精神修養には實に立派なものがある。そして明治以前の武士の此の種の修養には、佛教が、殊には禪が大きな基調となつてゐるのだが、多くの外國人は案外この點を知つていない。のみならず、日本人自身、口に東洋文化を説きながら、かかる佛教から受けてきたものの深い實情を知らぬのが残念だ」と述懐したことでありました。今でも案外、戦後の日本人にこの言葉があてはまりはしないかと、私は考えることがあります。(完)

### 新年號特集豫告

平和はわれらの切實な願望である。信仰者の平和への根本的指向を明示する本誌こそ社會各層におくる新春最良の書!

◆宗教と平和……………文學博士 川田熊太郎  
◆講和會議に・原子力問題に・佛教界に信仰者は如何に待望するか。

下村海南・朝比奈宗源・矢野謙太郎・椎尾辨匡  
野依秀一他各界廿數氏は端的に語る。

◆平和の鐘ひびく……………吉井 勇  
◆おほどかなる春……………吉田絃二郎  
◆日常勤行解説——その一……………佐藤 良智

年始用施本に、教田の開発に好適 三十部以上一割引、  
百部以上二割引、一部二十圓 送料三圓

### 法然上人を讃ふ

十月號の御法語についての眞野先生のお話、  
いたく病中の身に沁むを覺えました。病中、  
上人をしのび奉りて

寺 澤 亮

一枚の聖の文はまことなる愚のうえにかがやくものを

これの世の人といふ人たふとめよ日本が生みし愚痴の佛を

開宗の大き苦しみを經たまひて讃岐の國べひかり悲しも

寛けくも圓かなりける聖にぞ戀ひて御名よべあさな夕なに

かの白くきびしき道よ老われは心のうへの象徴とせむ

阿彌陀佛とよびて嚙む飯、阿彌陀佛となへ吞む飯  
かがよふらむか

かくの如やすき法の語きけば老という日に空しか  
らめや

(筆者アララギ會員)

# 南方のつるしあげ

旭 俊 正

これは戦時中の話、私が下ばの官吏として

南方に赴任の途中、輸送船内での出来事です。つるしあげ、という言葉が有名になつたのは之とは逆に、戦後、そして北方からの同胞引揚輸送船がもたらしたものの、けれども私のこの一挿話も、想えばまさしく、つるしあげの早い一例でもあらうか。

私たちの乗つた輸送船は南へ南へ、そして船内での話題は、たちまちその當時の、まだ戦ひのさなかのアメリカと日本との、どちらが一體困っているだらうか、という討論になつた。ところが我々のそのときの仲間で、日本の方が困つていゝと言ひ張つたのが私一人。アメリカの方がもつと困つてると最初から私の向うを張つてゐる相手は某省の瓦斯關係技師だつた。技術家の、専門めいた數字などをまじえての主張に、私たちの班の勅任官殿以

下、相次いでアメリカ困窮説に加擔してしまつた。私たちの班は各省から派遣された連中の混成班だつたが、遂に十數人對一の總攻撃を私は喰つてしまつた。

曰く絹の靴下が入らなくなるから、まづ婦人連中から日常的不満が起る。今に悲鳴があるぞ、——日本には三十年分の貯油があるんだ——考えてみると、まことにたあいのない角度からの子供議論なのだが、その時は何しろそんな狭い觀點しか持つていないのだから仕方がない。おしまいには、おまえの様な考えのものがよくも南方へ行く氣になつたもんだ、といった様なことまで飛び出してきてもう私は沈黙するより他はなくなつた。まさしく私はけんけんごうごうたる白い衆目の中で、つるしあげられたわけである。

最高學府を出た人たち、戦時政府の中堅官僚としてのこの人たちの良識がこれであり、これが通念でもあつた。中には議論も批判もとつくに棚上げして衆論の中に參加していた

假裝派もあつただらうが。私は任地に早く船のつくのが待ちどほしくなつた。ことほど左様にそれからは、南方の太陽の下で、私は白い目の光にとりまかれてしまつた。

敗戦になつて、復員船の中で、再びかつての輸送船上で私を沈黙させた數人のおエラ方と同船した。困つてゐた筈のアメリカの豪勢な携帯食料を支給され、チョコレートを頬ばつて彼等は悦に入つてゐた。歸りの復員船にはつるし上げはもうなかつた。というのは、あまりにも眞實がはつきりと示されていたからである。眞實が知られず、眞相がつかまれないところ、とにかく、つるし上げが成功？している様な氣がする。

歴史の大きな齒車の廻轉の前には、人間の小さかしい智慧の如きは、誤謬だらけである。

\*

\*

\*



## 商法と信仰

中野 尅子

お金が儲からぬのは、ナゼ儲らぬのでせう。ソレは儲らぬようなやり方をしてゐるからです。

儲からぬようなやり方とは何でせう。例えば、底の抜けたバケツで、底の抜けた桶へ水を酌み込んでゐる様なものです。いつまで経つても水は溜らぬ。コレはいけないと氣がついて、底のあるバケツを借りて来て酌み入れたが矢張り溜らぬ。ナゼか知らんと思つてよく眺めたら、まだ桶の底が抜けていた。これではいかぬと底の有る桶に取換えたら、初めて水が溜つた。ところが世間には底のある桶は持て來たが、アワテテ底の無いバケツを取り違えて酌み入れているから、一滴つつの滴だけで仲々溜らぬと困つてゐる人があります。それはまだ智恵が足らぬ。底のあるバケツで底のある桶へ、水をドンドン酌み入れたら、水は直ちに溜まる——コレを「宗教」と云う。

眞實の宗教の道とは、如何がはしい呪いや御祈禱でもありません。合理的本筋の道に出て、眞剣に努力し、正々堂々と、明るい成功を収めることであります。それが爲めには、精細な研究と大奮闘大努力が入用です。インチキや繞倖では成功せぬ。たとえ百萬圓のクヂを當てるのでも、確實に當てようとすれば、堅實な方法と、相當の資本が要る筈です。だから正確な「天地の法」に順はねば、本當の効果は擱かめませぬ。此の方法の研究と努力を「宗教」と云うのです。

だから金を儲ける爲の宗教ではナイが、本當の信仰、本當の宗教になつたら、必ずお金

## 法然上人に

### ものを聞く

法然上人の和語灯錄と言う書物の中に、壹百四十五箇條問答と言うものがある。今日の言葉で言へば、上人に物を聞く會とでも言うべきもので、其の聞き手は全部在俗者である。當時の民間の俗信仰と習慣があふれて居る。

私は酒のみと言う程ではないが「友有り遠方より來る」と言う場合には「酒あり亦樂しからずや」と、孔子様の言葉を不遜にも訂正する程度の徒ではある。然し、佛教に不飲酒戒と言うものがあるし、身少なく共佛門にあるとすれば、一應反省せねばならない。

○問、さけのむはつみにて候か。

答、まことにはのむべくもあらねど、この世のならい。

とあつて安心した次第である。上人はのむなどは仰せられなかつた。「この世のならい」は慶弔の習慣的儀式の酒のことかも知れないが、少し意味を擴大して頂きたい。然し「まことにはのむべくもあらぬ」酒のこと故、我

だつて人一倍儲かつて來ます。それは儲かるようなやり方になつてゐるからです。

先づ儲けよう／＼とあせらずに、儲かつて來るような徳を身につけませう。徳を身につけるとは、それがためには第一にその道の研究が大切です。

私が昔、九州小倉の大道で臺灣バナナを買おうと思つて立寄つたら「今スグたべるのかそれとも明日たべるのですか、或はお土産ですか。明日たべるのなら熟し加減のを差し上げます。」と言います。私は驚いた。成程、林檎にも生までたべるのにはドレが美味しい。焼林檎にはドノ品種がいいかと、賣手なら、それ位の専門的知識や親切がなければ本當の繁昌はしませぬ。

お百姓でも一番賢い者でなくては、眞のお百姓は出來ぬ位はわかつて來ました。薩摩芋など收穫が下手なら一反二、三百貫、上手なら千貫以上樂に獲れるから、少しも油斷がなりませぬ。勉強の効果觀面です。方法が「眞理」にさえ叶つて居れば、道は自然に開けるのです。お相撲さんでも、野球の選手でも頭腦のないような事では駄目。上達しませぬ。先づ知的に科學的に、合理的に、専門的知識を養ひ、その線に添つて技術を熟練し、経験を積む。手先の器用や、要領がいい位では大物になれませぬ。矢張り規則的基本からの研究と習練が必要です。

其上にもう一つ、親切、丁寧、實意があるという事が大切です。佛教では知慧と慈悲という事を申します。知慧だけあつても愛がないと、本當の細かい所まで届かぬ。知慧だけは安全剃刀の刃のように、よく切れるけれ共鋭くてコワイ人があります。店でも餘り立派に出來過ぎていて這入りにくいのがあります。ドコか少々抜けたところ、柔い、親しみ易い所が無ければいかぬ。

店は美しくなる事がいいが、賣子の氣持が冷たくなつたり、高慢になるのはいかぬ。

も人も「わる酒」は嚴につつしむことである。

廿世紀も明年で半ばになるが、それでもまだ色々な忌みごとが私共の周邊で行はれる。

○問、産の忌み幾日にて候か、又忌みも幾日にて候か。

答、佛教には、忌みと言う事候はず。世間には産は七日、又は三十日と申げに候。いみも五十日と申す。心まかせに候。

○問、忌みの者、ものえ参り候事は、あしく候か。

答、くるしからず。

○問、災治の時、もの詣せず、その折の着物もすつると申候は。

答、これも又きはめたるひが事にて候。ただ災治をいたはりて、歩きなどせぬことにてこそ候え。

○問、子を産みて、神佛へ詣る事、百日はばかりと申候は、まことにて候か。

答、それも佛法には忌まず。

此の他、種々ないみごとに對す質問が多いが、法然上人の御答は、「佛法にはいみごと」等言うものがない、其様なことを考えるのは

旅館でも玄關は立派でも、冷たい感じのする家より、建物は小さくとも温い氣持のする處の方が客が殖える。女でも、美人で身なりも一點スキの無い程いつも着飾つてゐるが、理智に長けすぎて愛嬌のないような事では、嫌はれる。男でも女でも、容姿のスマートやお喋り上手の交際家である位では、本當の信用はつかぬ。腕コキだ、ヤリ手だと云うだけでも、人は感心せぬ。そこに腕も無ければいかぬ、頭も無ければいかぬが情として温い美しい心根が無ければいけません。買手が子供のお客さんや、お年寄である場合には、特にいたわつて、やさしい言葉で、風呂敷包みも確かに結んで下げる様にしてやる程の、細かい親切が無ければいけません。それはお客様のため、或は自分の店の繁昌の爲めばかりでなく、それ程の教養や修養が、自然に自分に積めて居らぬようなことでは、何をやつてもダメです。

商賣道德と云うか、商賣に對する考えや、氣持にも、昔と今とでは大變な違いがあります。昔は商人と屏風は曲らねば立たぬと云つていたし、どんな悪い事をしても儲けた者が勝ちだと思い、「正直者は損をスル」と思つたり、又云つて居た。而し本當の商賣は悪い事づくめや、ズルイ事續きぢや繁昌せぬ。そりや今でも、悪るで腕コキの人も随分有るだらうが、それでは大實業家——一流の人物にはなれぬ。本當の信用ある店や、信用ある人はインチキではなれぬ。旨く儲けてはドロンをきめ込み、跡を味ましては逃げ歩く様な商賣なら出来るか知らんが、ますます繁榮して、ますます發展し、ますます信用を高めて、ますます世間の爲めになるような、一貫した、末廣がりの隆盛は、合理的な内容と、痒いところへ手の届く、細かい親切が無ければ得られぬ。偶然ではなく、努力、努力、努力です。だから、商賣繁昌にも正確に觀察すると、斯う云う繁昌の原理があつたのです——即ち精神的要素と、科學的要素、此の二つの要素を完全に具備して居らぬと本當に成功せぬ。

すべて「ひがごと」であるとしてきびしく否定される。近頃は私共の周邊で占易が大流行らしいが、法然上人に御伺いすれば「大きなひが事」として叱られることと思う。尤も、釋尊の御遺誡には卜占や呪術や仙藥が嚴重に禁ぜられて居る。

○問、女のもののねたむ事はつみにて候か。

答、世々女となる果報にて、ことに心憂き事なり。

○問、女房の物ねたみのこと、されば罪深く候な。

答、ただよくよく念佛申させ給え。

此れは御婦人に失禮な問題であるが、七百年前の婦人は「ねたみ」が強かつたらしい。

○問、父母のさきに死ぬるはわるく候か。

答、俗世のならい、前後力なきこと。

○問、破戒の僧、愚痴の僧を供養せんも功德にて候か。

答、すゑの世は、佛のごとくたとむべきにて候なり。

此の最後の問答は、筆者如き破戒ものに、寔に都合の良い様でもあるが、然し末世の僧と言はれたくない爲めには、心せねばなるまい。

## 脅 迫

西谷 修一

子供のころに患つた耳疾が、完全に治らないままに慢性になつてそれで悩まされつづけて來ていたが、數年前の冬にふとした風邪がもとで悪化して手術をうけました。ところが運がわるいというのか何しろ田舎にいましたので、その痛い思いを我慢しての手術も患部を完全には除去しきれなかつたものとみえます。その後もジワジワと内証していたらしく、東京に轉任して來ると、その間の疲勞がたたつたのか、間もなく一舉に爆發したような感じで、耳の周圍がカーッと熱く感覚が鈍くなつて再發してしまいました。

片方の聴力は完全に駄目になるが、と宣告されて、それでは困ると言つてみたところではどうなるのではなく、そのまま手術臺の上に横わつたわけです。唯、何であれ長い年月の耳疾の悩みが解消してくれば、とその時はただそれだけに望みをかけて、再び耳の後ろ

をグルリと大きく切開して骨を削りとる痛みに堪えてきました。しかし手術のあとの恢復は順調だつたのですが、もう少しというところで癒着しません。退院してからも、このために随分長いこと病院通いをつづけました。

さうした長い患いの間には、どうしても幽うつになる日があります。運命の黒いカードを拾つたままに、捨てきれずにいる自分をみじめに思う日があります。あるときは夢に、きれいさつぱり治つた姿をみて、覺めての後味の、いらだたしいわびしさにやりきれなかつたこともあります。毎日、殆ど決まつた時間に、決まつた道をバスにのつて行くのですが、道は決まつていても、日々の私の氣持は少しも定まつてはいませんでした。晴れた空の下で、私は悲觀していました。と思うと雨の停留所で、氣輕に治つてゆくような氣になつて口笛をふいていました。悲觀樂觀の日は、岸邊の波のように私の心に寄せてはひいていたのです。

耳がおわるいのですか、

ええ、中耳炎をひどくやりましたので、

と或る日、バスを待つ私は見知らぬ女の人に話しかけられました。耳のわるい人は随分多いですね、私の知つてゐる人でも案外居りますよ。手術をなさつたのでせう。

その人はこんなことから、耳疾になやむ人の誰かれのことを私に

話し始めた。そして、そうした人たちが、信仰をもつことで救われていつたことをだんだん私に説きはじめたのです。耳帯を二六時中かけているうつとうしさ。その耳底でたえず蜂のうなりのようにひびく耳鳴り、何時さつぱり治ると分らない焦心、醫者から解放されても片つんぼになる不自由さ、氣にしだすと、とめどもなくいらいらしてくる。こんなことをくり返していると神経衰弱になるぞと私は私をときに努鳴りつけた。あんまり長いことなので、知人などがいろいろの療法を教えてくれました。勿論私も一日も早くこの難疾から解放されたいとは思つたのですが、お呪いめいたことにする氣にはなれませんでした。お呪いを信ずるよりも、はるかに現代の醫學を信じていましたから。

「私たちは日頃わるいことを多く聞きますからね。あなたも随分わるいことを聞いたのでせう。よいことを素直に聞くように心掛ければ耳も悪くはなりません」

その人の言葉によれば私などは随分、悪聲を耳に入れた報いであり善言に耳を塞いできた罰を受けたわけです。反省してみれば凡下の私は巧言令色にも心を動かし易い。悪聲に耳を傾け、麗飾に目をうばはれてきていることはたしかに違いない。だと言つてその度に耳が悪くなつたり目が變になつたりしたんでは、たまつたものではなからう。悪いものを喰べれば腹をこわすことは考えられる。だと

言つて、聞いたり見たりしたもののせいで、耳を患い眼病にかかるという論理は、どうかと思います。

腹の中では、おかしいと思つても、私は絶対に悪言を聞いたことも、悪色を見たこともないなどと、思い上つた斷言は出来ない。たしかに愚かな弱い人間なのだから、眞面目に考えれば、素直に他人の言に耳を傾けなかつたことも多いし、時に反抗することもある。罪ふかく惡に誘はれ易い日頃の私の影がスーッと心をよぎつて、その人の言葉に、だから私は一應は肯く他はありませんでした。耳の治つた人の話は聞きたいし、私も早く治りたいのだから、そのときはやはり相當、眞面目な氣持で、その人の言葉に惹かれたのです。こうしてその人はだんだん××教の神さまを信ずれば、どんなに救われてゆくか、ということを熱心に説きはじめました。

お待ちしていますから、是非教會にいらつしやい。

とそのひとは場所を教えてくれました。しかし私は行くとも行かぬとも言いません。いやそれよりも黙りこくつてしまいました。そのひとの言葉が、何だかうるさくなりました。これも悪いことだとも思ひました。そこで私は、私が佛教の信者であり、お念佛を信じていることを言つて、そのひとの熱心な誘いをことわろうとしたのです。私は信仰についてそのひとは異つた立場で、やはり私なりに眞面目に考えていましたから、好い加減のごまかしでそのひとの

勧めを拒絶したくはなかつたのです。けれどそのひとは容易に之をききません。とうとう私は些か腹が立つてきました。

いや、私は私の信ずるところに従ひます。それで病氣がなほらくともよいです。

私はつつねました。しかし内心決して私は病氣が治らなくてよいなんて、それほど信仰にうちまかせた程の固いものをもつていたのではないのですから、實はこの自分の言葉も、暫らくは何となし厭な後味をもつていました。しかし、私よりもつと烈しい、怖ろしい言葉をそのひとは残すと、スタスタ私から去つて行つてしまいました。

あなたはそういう風に、折角わたしが親切に神さまのことを教えてあげようとするのにその言葉さえ素直に聞けないから、耳が悪くもなり、中々なほらないのですよ。

これをお読みになる健康な人たちは、きつと馬鹿げた話だとお考えになるでせう。けれど病苦に悩むその時の私には、この言葉は怖ろしい言葉でした。神とか、素直さとか、誰もがそれに反対しようもない言葉を上にかぶせた陥し穴が、この人の言葉にはあります。

今でも私は耳の調子の悪い日などには、ふいとこの言葉が、耳鳴りの中にひそかにひびいて来るのを感じることがあります。後味の悪い、暗い翳をひいたこのような言葉は、心弱き人たちをどれだけ

か悩ませ、どれだけか誤つた信仰にひき入れていることでせう。心の弱い人は、その時は私のように拒むことができて、やがてまた病氣が悪いようなことが来ると、きつと、あゝあの時、あの人の教えに従つていたなら、あるいは治つていたか、と考え、迷い悩みはしないでせうか。そして、それこそ今からでも、と言つた氣持になりはしないでせうか。

人間は迷うものです。悩みは人間がもつ避けがたい姿です。悩みをもち、迷いをもつことは生きていくことの表徴だとも言えませう。固より何に悩み、またどれだけ悩みに堪えることが出来るかは、その人が如何なる人間であるかに由りませう。けれどひとは、自分が確實にどういふ人間であるかを直接知るわけにはゆかないのです。信仰が私たちにこの迷いから覺め悩みに堪えてゆく光と力とを與えてくれることを私は信じています。けれども、私たちがそのために信じ仰ぐところの佛にせよ、神にせよ、信じないから不幸に陥しいれ、信ずるから金儲けをさせてくれるものなのでせうか。

ひと頃、「幸運の手紙」が問題になつたことがあつたのを御存知でせう。この馬鹿げた幸を待つ迷の心に惹かれた人もあつたようですが、辰野隆氏だつたか、「この手紙を受け取つてそのままにしておく、不幸が見舞うぞ」といつた趣向は、まさに脅迫である。こんなバカげた脅迫は實に怪しからん」と齒切れよく批評していましたが、

案外こうした脅迫にひつかかるのです。耳疾に悩む私に投げかけられた最後の言葉も、まさしく信仰脅迫といえます。新興宗教と呼ばれて盛況を示しているものの中には、迷信と私たちが考えるものの中には、こうした脅迫が多く隠されているのにお氣付きでせうか。病氣が治らないのは、事業に失敗したのは、その信仰が尙ほうすいからだと、きつと言われます。

釋尊は四つの眞理——四諦——を説かれて、その第一に苦諦を、即ち「人生は苦なり」と先づ示されています。勿論世の中には悦びもあり、楽しみもあります。もとより釋尊もそうした私たちの日常的な事がらについての喜び楽しみの姿を知つて居られました。しかし本當に人生の眞實を徹見した眼には、ただそれだけでは濟まされない相がまざまざと映つていたのです。

佛教への深い思索のあとをその文藝に示したヘルマン・ヘッセは「生れることは悩みである。成長は悩みである。種は土を悩み、根は雨を悩み、芽は發芽を悩む。そのように友よ、人間は運命を悩む。運命は土であり、雨であり、成長である。運命は苦痛を與える」と言つています。生きてゆくことは苦惱であり、苦難であります。しかし私たちはこの様な生の苦惱に堪えてゆくところに人生のゆたかなる價值がひらけてくるのです。そのような苦惱に堪えてゆく力を私たちに與え、私たちを勵まして、誠實なる生の営みに歩ませてく

れるものが信仰であります。信仰は、病を治すものでもなく、金儲けをさせてくれるものでもなく、私たちの誠實な人生の歩みを勵まし苦惱多き生に堪えゆく力をこそ與えてくれるものであります。私たちは世上にばらまかれている、美しい言葉に飾られた信仰脅迫をつよく拒むためにも、正しい信仰の力を最も切實にのぞみます。

## 初冬の寺

小 高 舒 明

住持いるらしくも見えて懸煙草

菩提寺へ齋さいの供養の諸一荷

今日に見し柿の照葉のかなしくも

引導の咳おのづから下あこ炬諷誦

維那僧の音聲ゆたか咳ゆたか

方丈の咳の廊下の前をぬすみ

庫裡大炉世話人會議果つるなく

# 安樂死の問題

時評

佐藤密雄

不治の病床にある母の切なる願いから、毒を飲ませて尊屬殺人罪に問はれた東京品川の成田某君の、所謂安樂死事件は世の注目を浴びつつ目下東京地裁で審理中であり、去る十月廿五日の法廷では、裁判長から、訴因を尊屬殺人から囑託殺人に変更する様に命ぜられたと伝えられる(讀賣)。

現代人の多くのものには、此事件を一概に否定し得ないものがあると思うかもしれぬ。助からぬ者ならば、せめて苦しめることなく死なせたいと言う、安樂死的心情が極めて自然なもの如くに感ぜられて居ると考えられる。然し、二時間後に死ぬ者を、その二時間の死苦を安樂に過ごさせてやり度いとか、死刑囚の刑の執行を苦痛を伴はぬ様にしてやり度いと言うことと、肉體的苦しみの中に一週間生き得る人を、苦しみの期間を短くするために、三日間で安樂死せしめることとの間に

重大な相違あることを忘れ勝であり、混同し易い。今度の事件も此の區別を混同したものと云える。

私の生母が癌の手術をすることになった。死を希ひ、手術をきらい、苦を堪えて居る母に、半ばの危険を伴う手術をしても、一箇月の生命は保證出来ないと云はれた時に、私は手術を止めようかとも思つた。然し其時、私の従兄である外科醫は「手術をしないなら今晚中に絶命だし、手術が成功すれば、或いは一箇月以上保つ。人命は最高のものであるが」と言つた。私は醫道の崇高な主張に救はれて、老母の生を二月半ものばし得たし、母も床上に於てではあるが、看護者達を通じて社會の空氣も呼吸し得たのである。

佛教に不殺生戒と言う生命尊重の誠めがあるが、其外に特に殺人を極重罪として禁止して居る。此の殺人を極重罪と定めたのは、印

度に厭世觀が流行し、自殺するもの、自殺を囑託されて、囑託殺人をなすものが佛教者にも出たからである。其處で釋尊は、自殺及び自殺を助けることを、人命を奪う殺人として規定し、此を極重罪として禁止したのである。勿論故意に他人を殺すことは當然の禁止であるが、人殺禁止の動機は、今度の事件と同様な囑託殺人であつた。今度の事件が囑託殺人罪になるとき、我々は意義深い反省を與えられたと思う。

此世に生を受けたのは、佛教的には、文字通りに、此世に役立つものとして、世の爲めの生業を荷負うて居るのであつて、自殺し、或いは自殺させることは、此世への叛逆罪となるのである。生命を自己一人の所有物と見れば、其放棄は自由だが、此れを生かす天地萬有のものとすれば、勝手に放棄すべきではないのである。此の様な意味で法律上は、自殺は罪を問はれず、囑託殺人は、一般殺人より輕罪であつても、佛教的には極重の殺人罪と見られるのである。又、敢て、佛教的な考えを持出さなくても、生命は最も尊嚴なるものに取つて絶對なものである。生を否定することは、世界を否定することである。如何なる肉體的苦にも増して尊いものである。人は

苦に堪えて居ることに同情して居ながら、その同情の相手方なる「苦に堪えて居る生命」を否定すべきではない。一時でも延び得る生を、ただ一秒と雖も短縮せしめるのは殺人罪だと心得べきである。

今度の事件はたゞこの特定の個人の罪にのみ止まらない。戦時以來の困苦が「苦惱するより安樂な死へ」の一般的感情を強めたし、例えば空襲を前に動物園の猛獸類を安樂死せしめた話等が今なほ話題となつて居ることも何程かの影響があると思う。此様な、社會的な空氣が今度の事件に多分の責任を負うべきものであると考えられるからである。然し、此の事件に依つて、社會的な深い反省がなされ、生命の尊重がすべてに優先することが認められるべきである。文化と言ひ平和と言ひのものも、眞の實體は人間の生命の尊重に外ならない。ゆめ、人命を損うべきではない。「苦勞するより死んだ方が良い」と言うことの愚かさと同様に、安樂死の囑託を受けることは文化人にあるまじきことである。

## 人 命 尊 重

人間の生命を手輕に亂費した戦争のあととはいへ、人命を輕んじ、しかも些かの反省もない、驚くべき異常心理の世相が、相次いで新聞種になつてゐる。睡眠藥、興奮劑の片假名ナマエの數々が、少年層にまでその影響を及ぼし、曾てはカンタンにはその名前にさえ接しなかつたような劇藥、毒藥が世上日常のようになりつゝ知られてゐる。こゝにも人命輕視というか、人生輕蔑の相がある。

最近各新聞のトップ・ニュースになつた學生社長自殺などもこうした戦後派派精神をよく物語つてゐる。小賢かしい知識、未熟な經驗で、嚴肅なる人生を輕んじ、重厚なる現實を蔑視したものゝ無慘なる敗退の姿である。良心の、人間的情操の裏付けを少しももたない知識で、現實を引き廻そうとするには餘りにも現實は壯重である。古い言葉だが「七轉び八起き」といつた人生との眞剣な組打をする深い人生態度の片鱗もそこにない。

こうした中で、事の起りは感心できないが人命尊重の一つニュースは大阪の女藥劑師が停電中に藥をまちがえて劇藥を客に渡したあ

との、あの眞剣な警察、ラジオ、新聞の客探しの奔走振りである。そして一人のおできの少年の生命が救われた。

少くとも人間の生命のあまりにもゾンザイに取扱われている世相にうんざりというよりは、不安を感じるわれわれにとつて、この事件は「いのち」の尊さ、それを守るための眞剣な世の姿を感じさせ大きな安らひをさへ與える。

基本的人權の尊重と叫んでも、根本に人生の、生命の尊重がなくては何になるものでもない。人々が先ずこの當然ともいふべき當然の點に、はつきり反省し眞剣になつて互ひに守りあうなら、新聞の三面記事の相當部分がもつと明るくなることだと思ふ。

不純な豫防注射藥、異型輸血のための死、或はよくある不衛生からくる集團中毒等々、とにかくどこに不注意があり、あとから責任の所在を探してみるよりも、その責任をもつ線の上に居る人たちが、人命のいかに尊きものかを基本的に身につけていれば、不注意も非衛生も防いでゆけるのである。今の世に一番必要なことは平凡であつてもよいから、こうした精神の均衡がとれてゐることである。

# 法然上人法語 (三)

眞野正順

すべて、われ等が輪廻生死りんねしやうしのふるまひは、ただ貪瞋痴どんじんちの煩惱ぼんのうの絆きづなによりてなり。貪瞋痴どんじんちおこらば、なお惡趣あくしゆに行くべき惑まどひおこりたるぞと心得て、是これを止とどむべき也。然れども、いまだ煩惱具足ぼんのうぐそくの我等なれば、かくは心得たれども常に煩惱は起る也。  
起おこれども煩惱をば、心の客人きやくんどとし、念佛をば心の主人しゆじんとしつれば、あながちに往生をば障さえぬなり。煩惱を心の主人として、念佛ねんぶつを心の客人とする事は、雜毒虛假ざうどくこけの善ぜんにて、往生には嫌きらはるゝ也。

近頃は、戦後にかけて、大分いろ／＼な宗教が出て來たやうです。その中には、随分、突拍子もない常識はづれの事を云ふものもありますが、その突拍子もない所が、却て人の心を引き、そこに何か在るやうに思ふ者も出てくる。

そうかと思ふと、或は、今迄の神や佛の名をごた／＼と集めて、勝手な解釋を施し、それで人の信用を繋いで行かうとする者がある。かく思ふと、今度は、實に巧妙な組織の

網を全國にひろげ、經濟上の利益などを交ぜ込んで、人の心を引きいている。人は初めはバカにしておりますが、その數に押されて、いつか知らず／＼心を動かして行く、といふのもあります。

かう云ふ風に、いろ／＼と異つておりますが、その共通の特色とする所は、それを信仰すれば、永年の病氣が治るとか、不運つづきが立直るとか。要するに、この眼の前の

欲望がすぐ満たされるといふ所で一致し、こゝに人の心を引きつける重點があるのであります。

然し、考えて見ますと、かう云うものは、宗教とは言ふけれども、實は、自分の欲望を遂げるために、宗教を使ふとしてゐるのであります。あたり前では、獲られそうもない健康や幸福を、なにか宗教という不思議なものを使つて獲やうとする。初めから、宗教や信仰が「めあて」なのではない。自分の欲望の満足が目的なのであります。こんなものは、決して宗教ではない。神や佛というものが、頼み込みさへすれば、どんな虫のいゝ註文でも引受けて呉れるものだ、と考えるほど大きな間違はありません。

ですから、かう云う信仰によつて、その願うような幸福は、決して得られる筈はないのであります。あるとすればそれから起る自己暗示か、そうでなければ、偶然の事柄を「そうだ」と思ひ込まされているのです。

今日の法語によりますと、法然上人は、

『かう云ふ、病氣が治りたいとか、もつと仕合せになりたとか、そういう欲望は、人間誰れもが持つ人情の自然である。止めんとしても止めかねるのが、寧ろ、私共の人生

であるが、然しこれを基として宗教を求めてはいけな。即ち、この欲望を、わが心の主人として、宗教に求めて行つてはならぬ。それは毒をまぜたいつわりの宗教であつてそれによつて、人は墮落こそすれ、決して、その望みを遂げる事はできない。』

と云はれるのであります。

このやうな欲を主人とした宗教は、決して、その望むやうな幸福を得る事が出来ないばかりでなく、人を卑しい感情の奴隷とさせ、人の本性を、次第に、その内側から腐らせて行きます。かういふ宗教が流行して参りますと、すべて宗教と云へば、みんな、此の様なものに過ぎぬかと思はせ、眞實の道を塞ぐばかりでなく、人の健全な理性や良心を曇らせ、臆面もなく、たゞ利己的な欲望を追ふて走るやうになり、社會大衆を其の内部から蝕み、文化國家の前途を危うくする、誠に怖るべき毒をまぜたものと申さねばなりません。

このやうな怖るべき過誤の原因たるや、實は初めの一歩にあるのであります。欲望を以て主人とするか、しないか、ただ夫れだけであります。たとひ善き宗教であつてもそれに向ふ心の態度によつて、忽ち墮落する。世に宗教ほ

ど墮落し易いものはありません。たとひ、佛教から出た佛菩薩であつても、決して安心はならないのであります。

それならば、眞の宗教に於ては、病氣や不幸に當つて、この世の仕合せを願ふ心は、全く思ひ切らねばならぬのであるか。

上人の法語はそれに續きまして、

『まことには、この様な欲情は捨て去るべきものであるけれども、捨てんとして捨て難きが、また我等の本性であるまことの信仰の道は、この様な欲情を己が主人とせず、信仰を我が心の主人とし、浮びきたる欲望は、その客人としてゆけばよい』

と説かれるのであります。

同じ一軒の家でありまして、そこに住む主人の人柄によつて、汚なくもなれば、美しくもなる。宗教も、汚ない利慾の棲家となれば、鬼氣陰々たる怪物屋敷に變つて來ます。宗教の主人は、どこまでも正しい信仰でなければなりません。そして、信仰がこの自分の主人とならねばなりません。

なぜならば眞の信仰とは、この自分自身の生れ更りでありまして、古い殻を脱ぎ捨て、新しい生命に移つてゆく事であるからであります。

人はこの世を營んでゐる内に、いつかさまぐの殻や垢を身につけて、この儘では凌ぎがたくなつてくる。そうし

て丁度、昆虫などがある大きさに成長すると、古い皮を脱ぎ捨て、全く新らしい身體となつて生長してゆくやうに、人間も亦た、今迄のせまい自分の殻を脱け出して、天地の大いなる生命に歸りそれと一つとなつて新しく生きてゆく時がくる。それが宗教であります。

この様な新しい世界が開けて参りますと、この生活に新しい氣息が吹き込まれ、今迄とは、まるで違つた姿になつて來るのです。

それは、譬へて云ふと、高い山に登つて行くのに似ています。頂きを目ざしてだん／＼登つて行きますと、やがて下界の蒸々する汚れた空氣は次第に消え去つてあの高山特有の快い澄んだ冷たさが、そこらの空氣にも、また岩や樹の膚にも感ぜられて來ます。こんな時岩角に寄つて見下しますと、遙かに遠く、いま登つて來たばかりの下界の姿が薄霧の中にちら／＼美しく見える。もうあの烈しい暑さも無く、ひどい雑音も砂埃もなく、すべては快い透きとほつた山上の空氣を通じて、美しく繪のやうに列んでゐる。一度び、私の居る立場が高くなり清くなれば、それを通して萬物は、その狭い「いさかい」から脱け出して、美しく生れ更つてくる。宗教の世界もまた其の様であります。

一度び信仰の世界に入つて、天地の心に登つて参りますと、さきに私共を惱して來た色々な欲望も、そのまゝ高められ清められて自然によりよく成し遂げられてゆくのである。

ります。

病氣の場合などでもそうです。永い患いなぞして居ますと、何か奇蹟でもあつて、この苦しみを一返に取除けて貰へたらとよく思ふ。そう云ふ焦<sup>あせ</sup>だゝしさは、私共もよく経験して参つた者でありますが、かう云ふ徒らな心の焦<sup>あせ</sup>りが實は、却て自分を搔亂し、病勢を増すものである事に、また其本人が却て善く知つてゐる筈であります。

病を養ふ第一の道は、まづ此肉體を内から支えている精神を、常に平靜に、あたかも水の如く淡々と流れゆかしめる事であります。そして我が體力の全部を障げられる事なく、悉く病む所に集注せしめて行かねばなりません。然し煩ひを我れと我が一身に傾け、自ら悩んでいる間は、この様な轉回は出来ません。療病の第一歩は、我が心がこの病む身體を超えて、天地の心へと脱け出る事にあります。そうして一切を大いなる力に任せ、今迄病を背負つて苦しんでいた自分が、あべこべに病の方におぶさつて仕舞ねばなりません。

かういふ悠々として任せ切つた心と共に、我が全力の體力は障げられて事なく、働きはじめ、驚くべき療病の目的を遂げる。死すべきが甦り、不治なるものが再び立つ。信仰の思はざる奇蹟が現はれるのは此時であります。これ誠に信仰の心が企<sup>たく</sup>ますして産み出すところの驚くべき靈能であります。

また、人の運命に對してもそうであります。信仰の心はその日々の生命を感謝を以て喜び勇んで送り迎へさせる。運命は實にこの心の態度によつて開かれるのであります。行き塞つた運命は、たとひ偶然の奇蹟によつて一時開かれたとしても決して眞に開かれたものではありません。偶然の幸福を望むやうな心では、必ず再び行塞る時がくる。大切な事は天を仰いて幸運を探すよりも、この日々を喜び勇んで働いて止まぬ心を探す事です。この心の在る處、必ず運命はその人に微笑みかける。實を云へば、人が良い運命を願ふのも實は、この喜び勇む心を求めているからなのです。もう少し運命が良くなつたら自分はさぞ喜び勇んで働けるだろうと。人は、ただ此心の中にのみ生き甲斐のある事をよく知つてゐるのです。それ故、徒らに天を仰いで仕合せを願ふより先きに、まづ此心を自分の中に作る事に努力すべきでありまじやう。宗教の高く博い心が齎<sup>あづか</sup>すものは、即ち、此心であります。「信仰ある者世に亡びず」と云ふのはこの譯であります。

この様に心一たび、高きに登れば、病める心も、迷へる心もその一切の欲望は悉く高められ淨められて、思はざる姿において遂げられて行きます。「念佛を心の主人<sup>あかじ</sup>とし、煩惱をその客とせよ」と云ふ御法語の意味は、即ちこれでありす。

——永らくの御清聴を感謝いたします。(完)

## 芝園だより

◇年の暮だとして、世間並に慌ててみたり、一年を回顧してしよんぼりしたつて始まらない。編集子の留守を幸いペンをかりて一席。

◇日本橋の三越でいま吉田絃二郎先生の自著装釘畫展が開かれていゝる。文章の表現は簡古談々を第一義とすると言ふ先生の言葉そのまゝが、その装釘畫にも現はれて、その味いは人々の眼を惹きつけていゝる。

◇日本橋から銀座へ、そして築地へ歩いてゆくと、東京劇場あたり大歌舞伎興行の飾り物で賑やか。吉田先生の作「二條城の清正」が久し振りに上演されてゐる。勿論清正役者の定評ある播磨屋の獨壇場古いことだが昭和十年の初春興行に正月の華やかな空氣の歌舞伎座で之を観たのを想ひ出した。

◇そう言えば十月の演舞場では先生の新作「新曲竹生島」が上演され坂東三津五郎の上京第一回の登

場に好劇家を喜ばせた。劇作方面でも先生の何時に變らぬ御健筆を喜ぶと共に私たちは「法然上人」が先生によつて書き下されて上演される日を描いていゝるが。

◇眞野先生、學長としてとみに多忙。學界教界に潑刺たる新胎動が感じられてきたのは嬉しい。この間、大學記念祭に各研究室チームのリーグ戦は先生寄贈の大カップを廻つて學生ワーワー。ところが更に張切つたのがカップはわが研究室へと應援の教授連、勝盃は眞言學科へ。さては秘密加持がものを言つたかと大學雀がピーチク。

◇本誌がひろく信仰運動に進む一方、學的深化にたゆみなき努力を續けているのが教學院研究所、その發行する「佛教論叢」は戦後學界に大きな刺戟を與えたが、今度大野法道博士を所長に迎えて、新しい前進が企劃されていゝる。

◇研究所主幹には佐藤賢順氏、いま佛教放送で連續マイクに立たされていゝる。時々健康に心配される

ようだが、思い切つて活躍を願いたい。大正大學幹事として味のあゝる動きを示される佐藤良智氏、淨土宗新聞の「一枚起請文」解説は仲々好評、新年は淨土で先づ日常勤行の解説をお願いする由。

◇鎌倉の大佛様に抱かれて佐藤密雄氏、學位論文執筆中と聞くが、同人の中では外人への接觸面の廣いのも同氏、鎌倉のもつ空氣の味で淨土のよき風格を育ててほしい

◇竹中君が編集室の机で何やら苦しい顔、大學の講義、幼稚園の經營寺坊の再建そして淨土、よくまあ頑張るが今日は何の苦勞かと覗いたら、帳簿に大分赤インキの跡、ははあ赤字難だな。戦前の部數に早くこぎつけて竹中君を喜ばせたものだ。誰もが良心的な雑誌だと賞める淨土を、知らない人が未だ多いのだから。諸君、會友を一人でも多く紹介しよう。

◇編集室の女房役で苦勞した吉田宣成君、めでたく新郎になられたので、後任は前田龍海君、どうぞ

よろしく。おや藤田編集子が入つてきた。樂書を叱られぬ中に失敬しよう。では皆さんまた來年も御元氣で。(中間子)

### 入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 十二月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和廿四年十一月二十日印刷  
昭和廿四年十二月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野正順  
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都千代田區神田保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番  
會費番號B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

## 佛教現代語譯の嚆矢！

佛教が眞に現代に生きて骨肉となるには  
まづそのことばが充分に消化されねばならぬ。  
今回淨土教の根本經典の現代譯が服部氏多年の努力  
によつて完成した。

## 新選擇集

(人名書名  
解説附)

服部英淳譯著

B 6 判上製 總頁二三〇頁  
定價一八〇圓 送料二〇圓

從來の如き單なる漢文の書流しではなく  
現代文口語體を以つて譯出された。  
本書を通じて元祖上人の御信念に觸れられんこと  
を。

發行所 東京都豊島區西巢鴨四丁目  
大正大學 淨土學研究會

中村 辨 康著

## 法然上人とその信仰

特價十五圓 (定價三十圓)

菊 半 截  
再版八〇頁

送料二部まで六圓 但し二十部以上は  
當方にて負擔、郵券代用可  
◇特價期間 一月末日迄

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

東京都港區芝公園五ノ一〇